

---

# 東方 ゆ餡穢

緑野ボタン4号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方 ゆ餡穂

### 【Zコード】

N1057U

### 【作者名】

緑野ボタン4号

### 【あらすじ】

とある男子高校生、悉皆屋ゆとりは、幼女妖怪となつて幻想郷に転生した。彼のもつ能力は「あらゆるもの」「ゆつくりしていつてね」に変える程度の能力」だった。

## (前書き)

警告！この小説は以下の点で注意が必要です！

- ・この作品は東方Projectの一次創作です。
- ・オリ主T/S転生チートモノです。
- ・原作キャラが死にます。
- ・軽い下ネタがあります。
- ・駄文です。
- ・作者の原作知識の欠如により、出てこないキャラがいます。時期的には風神録あたりです。

あ、道路に飛び出そうとしている男の子がいる助けないと間に合えーっ！ラックガシャーン！以下略

\* \* \*

俺の名前は悉皆屋ゆとり。ひどい名前だろ。これ、本名なんだぜ。俺は至つて普通の男子高校生。下校する途中、俺は通学路沿いにある公園に通りかかった。そこでボール遊びをしていた少年が、不注意で道路に飛び出してしまう。俺は思わず、少年を助けようと身を乗り出し……

「それなんてテンプレッ！」

目が覚めると、知らない場所にいた。見渡せば、青く澄み切った水をたたえる湖。そのほとりに俺はいた。

この状況から冷静に推理するに、俺は異世界転生を果たしたようだ。外見もかなり変わっていた。具体的に言うと、幼女になつていた。真っ白な着物を着ている。湖の水面に映った自分を確認してみるが、見事に美幼女だ。

俺はいつたいこれからどうすればいいのか。ここはどこなのか。

ひとまず考えるに、この手の転生モノには必ず主人公補正として特殊能力が備わっている。たとえば、最強の身体能力とか、無限の魔力、全属性魔法使用可能など。俺にも何かしらの能力があるはずだ。

すると、頭の中に自然と俺のもつ能力に関する情報が浮かんでくるではないか。よし、いいぞ、これで勝つ。俺の能力はズバリ、

これだ。

『あらゐるもの』を「ゆづくつしていつてね」に変える程度の能力』

絶望した。

\* \* \*

復活するのに相当の時間要した。

どうやら、ここは東方Projectの世界らしい。……まさか、俺という個人が幻想入りしたわけじゃないよな。

それにしてもひどい能力だ。まあ、いいさ。弾幕が強ければ問題ないのだ。生前の俺はeasyモードでコンティニューしまくる程度の能力を持っていた。だが、妖怪の人生は長い。練習すればつまくなるだろう。

俺が女になつたもの、東方の世界が関係しているのだろう。おそらく、ZUN神のお導きだ。幻想郷は基本的に少女しか受け付けない。

そうそう、確認しておぐが俺は妖怪のようだ。体の中に雀の涙ほどの妖力を感じる。人や神や魔法使いやその他もろもろではない。バカヤロウ！俺はまだ高校生だから魔法使いじゃねえ！

とにかく、手始めに近くにだれかいなか探してみようと思う。今の俺の妖力では弾幕勝負をふっかけられて、メタンメタンにされそうな気もするが、一人でいるよりマシだ。

しばらく歩くと、小さな子どもの笑い声が聞こえてきた。幼女一人がたわむれている。チルノと大妖精だ。カエルを捕まえて遊んでいるらしい。

「やあーーんにちはー！」

俺はさわやかに挨拶する。チルノと大妖精がこっちを見た。

「あんただれ？この辺じゃ みない顔ね？」

「俺は悉皆『屋ゆとり、外の世界から来たフリーの妖怪さー』それにしても、嫌な事件だつたね」

「事件つて何が？」

しかし、生チルノが見られるとは転生オリ主さまさまだな。チルノは俺のことをぶしつけにジロジロ眺めてくる。

「あんた、見るからに弱そうね。そつだー！ 弹幕『じつ』しましょー！ あたいが訓練をつけてあげるわー！」

こいつ、明らかに俺の妖力を見て、戦いをしかけてきやがった。だが紅魔館では、俺はだれよりも多くチルノと闘つて来たんだ。もはや、お前の弾幕のパターンは見切つた。ちなみに咲夜さんと闘つたことはない。でも、スペカすら持つていない今の俺には、弾幕合戦を受けて立つこともできないという。

「いやあ、あの最強と名高い妖精チルノ様と戦おうだなんて、俺程度の実力ではとてもとても」

「え？ あんた、あたいがさいきょーだつて知つたの？」

「もちろんです。外の世界ではチルノ様の強さを知らない者はおりませんよ」

大妖精が胡散臭そうな目を向けてきた。まあ、そんなに人気だつたら幻想入りしねえわな。チルノより大妖精の方が小賢しそうだ。

「やつぱり、あたいつたらさいきょーね！」

それに比べてチルノの扱いやすいこと。所詮は?といふことか。よし、ここはうまい」と口車に乗せよつ。

「そこで提案なのですが、実は俺の持つている能力を、チルノ様にぜひ活用していただきたいのです」

「あんたって、どんな能力をもつてるの?」

「実は、俺の能力は『妖精を最強にする程度の能力』なのです」

「ほんとに!?」

チルノが目を輝かせて食いついてきた。一流の釣り師は竿のしなりを見たとき、すでにそなたの獲物が釣れるか否か判断するという。これは……釣れた!

「チルノちゃん、信じちゃだめだよ。この人、すごく怪しいよ。そんな能力あるわけないよ。『妖精を』って限定してるあたり、怪しさ爆発だよ」

「ええー? そう? でも、本当だつたらどうするの? さいきょーになれるのよー?」

ちつ、大妖精、めんどくせえ奴だぜ。

チルノはかなり迷つたようだが、意を決したように俺に向き直つ

た。

「いいわ！あんたの能力をあたいに使いなさい。」

「チルノちゃん！」

「大丈夫よ！たとえ嘘だつたとしても、こんな『ジン』並みの妖力しか持たない妖怪の攻撃なんてあたいには効かないわ」

「嘘ジヤナイデスヨ。最強ニナレマスヨ」

必殺、ゆっくりビーム！

俺の指から放たれたビーム状の弾幕がチルノを貫く。

「ぐつ……これで、あたいはそこきよーこ……あやああああああ……あ……

ゆっくり？して、いってね！」

やあつたぞ！実験は成功だ！

先ほどまでチルノがいた場所には、嫌悪感を催す微笑をうかべた生首饅頭が転がっていた。そして、頭部のないチルノの体も転がっている。頭だけゆっくり化するのか。グロいな。

「あーはつはつはつはつはつはつはーばかめ、まんまと騙されおつて！」

「チルノちゃんー？あなた、なんてひどいことをー！」

「おおつと、動くな。俺に逆らえば、この『ゆっくりするの』が

どうなるか……わかっているな?」

「ゆっくり? つていってね!」

俺はチルノだつたものを抱えあげ、大妖精を齧る。大妖精は発射しようと集中していた弾幕を解除する。

「そう、それでいい。では、お前もゆっくりしていけ」

ゆっくりゲーム!

「いやつ、やめてえええええ……

ゆっくりだいていってね!」

ちょろい。ゆっくり化してしまえば」こちらのものだ。

それと気がついたのだが、さつきからゆっくりちるのを抱いているのに、暴れる様子がない。変身させる前に、あんなに外道なことをしたのに、どういうわけか俺になついていた。大妖精も同様に逃げる様子がない。どうやらゆっくり化させた奴らは、俺を主人として慕うようになるらしい。

「楽しいなあ、楽しすぎるぞ……うん?」

そのとき、俺は自分の体の中にはか異質な力が満ちていることに気づいた。妖力ではない。靈力でも、魔力でも、神力でもない。この力は……ゆ力!?

その不思議な力、ゆ力は一匹のゆっくりから流れこんでいることがわかった。神力は人間の信仰心を集めることによって高まるという。ならば、これはゆっくりの信仰心が集まつた力。なるほど、

俺はゆつくりを増やせば増やすほど、パワーアップする」ことができ  
るらしい。

「ふふふ、なるほど。」の力を使えば、幻想郷を支配することも  
可能ではないか」

俺の壮大なる野望、ゆ霸道の幕開けだつた。

その一步として、チルノと大妖怪が持つていたスペルカードをぶ  
んどつた。ゆつくりには不要な品だ。俺が有効活用してやろう。  
カードを持つて念じると、技が表現された絵が浮かび上がるよう  
だ。やつてみた。

ゆ符「ゆつくりして逝つてね！」

\* \* \*

言つても幻想郷は広い。

ろくに原作知識もない俺はこの辺りの地理など知つてゐるはずも  
ない。ゆつくりどもに聞いてみても、「ゆつくりしていつてね！」  
としか言わないので蹴り飛ばしたくなる。

ゆつくり一匹を引き連れて、道なき道を進んでいく。超歩いたよ、  
俺。もうこれ遭難してゐんじゃないかと思つほど歩いた末、ようや  
く開けた場所に出た。

「おおー、ゴーティフルな場所だ」

そこは花畠だった。あれ？花畠って、なんかやばい妖怪がいた気  
がしたんだが……思い出せない。といつことは気にするほどの強敵  
はいないのだろう。

そういえば、俺は「あらゆるもの」ゆつくりでわかる。といつ

ことは、妖怪や人間以外でもゆっくりにできるのか？  
俺はゆっくりビームを花に向けて照射してみた。

「おうへつじてねー。」

花の中央にゅつくりの顔がもこもこ生えてきて、ゅつくり顔面花が咲いた。面白いのでゅつくりビームで辺り一画、焼き払う。

やばい、このキモを半端ねえ。よし、この花畠をひとつくり花畠に  
変えて、幻想郷一のホラースポット（笑）にしよう。

「そうと決まれば、もつとビームの出力をあげて……」

「あなた、私の大切な花たちに一体、何をしてくれたのかしら？」

背後から圧倒的な妖力を感じた。俺の妖力がゴミに思えるほどの差だ。振り返ると、そこには日傘をもつた少女がいた。こいつは……

「げつ、風見幽香！幻想郷でも最強クラスの大妖怪じやねえか！」  
なんで、こんなところに……」「

「あら、『J丁寧に説明ありがとウ。』Jijiは私の花畠よ。死ぬ前に一つ、勉強になつたわね？」

やべえ俺のセリフ、モロモロ感丸出しじゃんー。そりゃ、忘れてたぜ。ゆうかりんは花の妖怪だつた。

謝つても無駄だらうな。多分、土下座したらそのまま頭部粉碎されそうだ。

正面切つて戦えば、一秒で決着がつくだらう。転生やうやう死亡するなんてそんなの嫌だ！

「JJうなつたらしかたない……いけ！俺のゆうくつうるのー君に決めたつー！」

「ゆうー。」

時間稼ぎにしかならなさそりゃ、饅頭チルノを生贅にさせよ。モンスターボールのJとく、チルノを投げる。ここひで足止めして、その隙に逃げる！

「なにこれ」

ブショウツ！

「ゆばつー。」

ゆうかりんの足元に転がつていつたゆうくつうるのは、日傘の先端で串刺しにされた。足止めにするならんとは、想像以上の弱さ。

ゆうくつうるのは脳天を傘で刺され、口から餡子を噴き出して即死した。はやー、はやすざるぞオオオオー！！

「餡子が傘についた……ほんとにあなた、不愉快ね。ここまで私を怒らせた妖怪は久しぶりよ」

やばい、死亡フラグがさらに濃厚に。

「う、ごめん…悪気はなかつたんだ…出来心なんだ…（ほら、お前もいけ！チルノの死を無駄にするな…）」

「ゆーー！」

俺は口で謝りながら、苦し紛れのゆっくりだいようせいを投入する。チルノがピチュつたのを見てびびつたのか、饅頭大妖怪は抵抗している。しかし、俺は構わず放り投げた。

「ゆーー！」

「田ざわわいよ」

「パアン！」

通常弾一発でけし飛ぶやつくり。餡子がむなしく飛び散った。

「ま、持つてくれ！頼む…殺さないでくれ…」

「いいわ。もつと命乞いしなさい。その苦悶の表情を見ながらいたぶるの、悪くないわ」

「のどじ妖怪が！我々の業界ではじまうびですつてか！？俺はその業界には、まだ所属してねえんだよ！

なんでだよ！ちょっと、花畠にいたずらしただけだらうが！殺す

までするか、フツー！？ ゆっくりたちがいなくなつた今、俺にできることなんて何もない。なけなしの妖力を振り絞つたところで、撃てる弾なんてせいぜい十発程度。余裕で死ねる。

ゆ力を使えばもう少し撃てるかもしれないが、チルノと大妖精が死んだ今、ゆ力は残つていない……あれ？なぜだ？ゆ力が以前よりも増している。

はつー…そつか！

「……」

「急におとなしくなつたわね。命乞いはもうおしまつ？じゃあ、殺すわね？」

「……へつへつへ

「……何がおかしいのかしら？」

幽香は怪訝なまなざしを俺に向ける。悪いが、この勝負、俺の勝ちだ。

「さて、じゃあ最後の悪あがきもさせてもらつつか……！」

俺は懐からスペカを取り出し、高く掲げる。

「スペルカード！？」の間に及んで往生際が悪い。あなた程度の小妖怪じや、私を傷つけることすらできな……！？」

幽香はすでに俺の術中にはまつていることに気づいたどうぶつ。しかし、もう遅い。お前は俺のゆっくりたちに囲まれている。

「そんな私の花たちが！」

ゆつくり花と言えど、ゆつくりはゆつくり。その花弁が一斉に幽香の方を向いていた。そして、その一つ一つからゆつくりビームが発射される。四方八方からあびせられる弾幕に対し、幽香は逃げることができなかつた。変わり果てた花の姿に気を取られたのかもしない。

ゆ符「ゆつくりして逝つてね！」

ゆっくりマスパつていつてね！」

勝つた。俺は、勝つた。

「勝つたやうな気がするが、何だか、」

ГЛАВА 1

ゆづくり花たちが俺を祝福してくれた。俺は生き残ったのだ。

「ふつはつめつめ、おのむかがつとも、ゆつへつになつてしまえ  
ば怖くない!」

「ゆっくりマスパつていつてね！」

俺をゆりへつめつかを持ちあげ、そのまゝたを引き延ばしてもう二ヶ。

てあそぶ。

「ほーれ、ほーれ、どうしたあー！俺を殺すんじゃなかつたのかあ  
？」

「 ゆ、ゆつくつ、ますぱあ

そこで俺は気づいた。ゆつくつゆうかにみなぎる力に。  
このゆつくりは強大なゆ力を内包してこる。おそらく、もともと  
大妖怪だったときに持つていた妖力が、ゆつくりになることによつ  
てゆ力に変換されたのだろう。

このゆ力があれば、俺は大妖怪とも戦うことができる力を手に入れ  
られる！

「 喜べ。お前は、俺の礎となるのだ

「 ゆ、ゆつくつ、ますぱあ

俺はゆつくりゆうかにかぶりついた。頭からむしゃむしゃと巨大  
饅頭を食べる。

ムシャムシャガツガツー！ムシャムシャガツガツ！

抵抗されたのは始めの少しの間だけだった。やわらかいその生地  
にかみついて、饅頭皮をはぎとつ、中の餡子に到達するときは、  
もう息絶えていた。

そうして、俺はゆつくりゆうかを完食した。

「あやややーー！」、これはピック一コースです！

そのときの俺はゆうかりんを食べるのに夢中で、空からこじらを  
見ていた者がいることに気づかなかつた。

\* \* \*

「はあー、いつも平和だと退屈でしかないわ。なんか、適当に異変おきてくんないかしら」

ところかわってここは博麗神社。今日も脇巫女靈夢は、参拝客の少ない神社で暇を持て余していた。

「号外一つ！号外だよーつ！」

「また、号外……今度はどんなくだらない記事が載ってるんだろ」

鳥天狗の新聞屋、射命丸文の書く記事はいつもいい加減なものばかり。号外と言つても、それほど大した内容のものではないだろうとタカをくくる。

しかし、やることもないので、その声につられて境内まで出てきた。

「あ、靈夢さん！大事件ですよ！あの花の大妖怪、風見幽香が殺されたんですね！」

「え、それホント？」

にわかには信じられない。渡された新聞には、[写真が映つっていた。花畠で対峙する二人の妖怪。その写真の下に、大きな見出しがついた写真があつた。

「『風見幽香食われる！これが衝撃の捕食シーン』って、あんた、もつとましな嘘つきなさいよ」

「なんですかー食べられますよ、ほらー。」

そこには、饅頭生首をむかげる小妖怪の写真がある。どうみても、この饅頭が風見幽香とは思えない。

「違うんですー。」だが、この妖怪の能力なんですよー。こいつの弾幕に当たった者は、この姿に変えられてしまうんですー。」

胡乱気な表情で文を見つめる。正直、信じがたい話だ。しかし、文の記事はいい加減なものがかりだが、ソースはちゃんとあるネタだ。ここまで大それた嘘記事を捏造したとも思えない。

もし、これが事実だとすれば、少々厄介なことになるかもしれない。あの風見幽香を倒すほどの存在が、急進出したとなれば幻想郷のパワー・バランスに影響が出かねない。これは調査する必要があるだろう。

「わかつたわ。ちよつと暇してたところだし、私もこの妖怪と接触してみる」

「ホントですかー？帰つたら、お話をさせてくださいね  
あんたが直接、取材に行きなさいよ。」

「無理ですよー!だって、怖いじゃないですか」

靈夢はため息をついて、神社から飛び立つた。

\* \* \*

「ふははは！ 次はどこから攻めようか」のつ

道中、有り余るゆ力を用いて、わんさかいる小妖怪や妖精などを手当たり次第にゅっくり化しまくつた。俺の周りには、蠅のようにゆっくりようせいが数体、飛び回つていて。まるでオープ。

それと、俺の白無地の着物におかしな模様が浮かび上がつてきた。ゆっくりだ。マジでどうにかしたかったが、俺の持つていてる服はこれしかないのであきらめて我慢した。服が変わつたところで、どうせまた浮かび上がつてきそうな気がする。これもゆ力の影響か。

俺は道に迷うといけないので、湖のそばまで戻ってきた。とてつもない道のりだったが、帰りはゆ力を用いた飛行術を使ったのでかなり時間を短縮できた。空から見ると、俺がどれだけウォーキングしたのかよくわかる。ふと見れば、湖の近くに大きな洋館があるではないか。あのまつかつかな外観は紅魔館で間違いあるまい。最初ここにいたときは、霧が濃くて見えなかつたのだ。

紅魔館に行くと、門の前で美鈴が寝ていた。

「ゆっくりビーム！」

「ゆっくりちゅういくつていつてね！」

瞬殺か。さすがは居眠り大魔王、隙しか見当たらぬ。

「リアルではあれほど苦戦した紅魔館の攻略も、案外簡単に終わりそうだな」

「それは」期待に添えず、申し訳ありません

はつと息をのむ。こんな気配を微塵も感じさせない登場をするの

は、あの人しかいない！

俺は瞬時に、自分の体の周りにゅっくりシールドを展開する。その後、体にぶつかつてくるミニサイズゅっくりたち。これはナイフをゅっくり化させたものだ。俺の着物が餡子まみれじゃねえか。

「今の攻撃を防いだか。見た目によらず、やるやうね」

十六夜咲夜。紅魔館のメイド。完全で瀟洒なあの人だ。この漢字が読めずに、俺は何と発音すればいいのか長いことわからなかつた。これは「しようしゃ」と読むんだぜ！え？知つてるつて？

「見かけによらずとは失礼だな。俺のこの膨大なゆ力を見よ！」

「ゆ力？何のことかわからないうけど……」

「ナニ？ゆ力を感知できないのか？」

だが、それはむしろ好都合だ。ただの小妖怪と誤解してくれた方が、油断を誘えて便利だ。俺の妖力はカスだからな。

「それよりも、うちの門番に何をしたの？はやく元にもどしなさい」

「いや、戻し方わからないんだよね」

これは本当だ。俺の能力は『あらゆるのものを「ゅっくりしていつてね！」に変える程度の能力』。変えた後のこととは知らん。

「あくまでしらをきるか。いずれにしろ、あなたの身柄はお嬢様に預けることになるけれど、いいわよね？」

「レミコニアか。なるほど、俺の手でカリスマブレイクしてやるのもいいかもしれん。だが……」

咲夜がナイフを構えるそぶりを見せる。しかし、俺は動じない。瞬きをするほどの短い時間。勝敗は決した。

「な、なにが、起つて……」

咲夜の体が倒れる。全力疾走した後のように荒い息をつき、起き上がることもままならないほどに体力を消耗している。

「説明してやる。俺のシールドを無効化するために、能力を使つただろ？ 時間を止めて、その隙に仕留めようとした。だが、残念ながら君の能力は、すでにボクが掌握している」

俺はクイックと眼鏡をあげる動作をする。かけてないけど。

「どうして、こと、なの……？」

「俺は『あらゆるもの』を『ゆづくら』していつてねー」に変える『チカラ』をもつ。すなわち、君の能力を改竄することも可能というわけだ

「馬鹿な……あなたの能力の詳細がわからないが、いくら強大な能力と言えど、能力の定義に関わる変更を加えることはできないはず……」

「ゆうかりんの尊い犠牲によつて高まつた俺のゆ力をなめるな！ お前の周囲の時間を“ゆづくり化”した。すなわち、お前の能力は

「時間操る程度の能力」から「ゆっくり時間操る程度の能力」になつたのだ！これによりお前の能力にゆっくり属性が付加された。ゆっくり時空を時間操作するためには、大量のゆ力が必要となる。しかし、お前のもつゆ力は一般人の平凡な値だ。時間操作しようとしただけで、ゆ力を使い果たし、ゆ力切れでダウンすることは田に見えている。よつて、お前の負けだ！十六夜咲夜！」

「意味が……わからない……」

だらうな。俺もよくわかんねえよ。

「お前もゆっくりになれ。そつすればわかる」

ゆっくりゲーム！

「……ゆっくりぬつてこつてね…」

メイド服を下した。やるな俺。最高にクールだ。

今は昼だから、吸血鬼のれみりやは寝ているのだろうか。いちいち玄関から入つて階段を上がるのも面倒なので、ゆっくり飛行術で飛んで二階のバルコニーに降りた。

「咲夜？」

部屋の中から幼女の声がする。俺は恭しく返事をした。

「いかがなさいましたでしょつか、お嬢様？」

「つ！あなたはどちら様？」

レミリアの紅い眼が俺を見据える。  
だが、甘い！

「くつ！ な、なにこれ！ ？ やだ、気持ち悪いー。」

「それこそが、ゆづくり運命！」

「ミリア、お前のゆ力では俺のゆつくり運命を見ることはできない。絶えず微笑み続けるいやらしいゆつくりの笑顔で塗りつぶされた、俺のゆつくり運命を網膜に焼きつけよ！その嫌悪感に、お前は耐えられないだろう。

「ああああああああ

六

「すみません、この本、借りたいんですけど…」

「はーい、ちょっと待つててください！」

「アーティスト」

「え、 いきなり、 なに……」

「あいつにあつてこつてね！」

図書館に来た俺はさつそく小悪魔をゆっくり化する。相変わらず俺の能力は最強だなあ、はつはつは。

「あ、あなた、小悪魔になにを……ー？」

小悪魔を下した直後、だれかが俺に声をかけてくる。ん？なんだ。紫もやしもいたのか。動く大図書館こと、魔法使いパチュリー・ノーレッジである。

「み～た～な～！」

クワアアアアア！

俺はゆ力を全身にみなぎらせ、飛行術を行使する。妖力じや飛ぶ」ともままならぬつだからな。

「いつたい何者？こんな不審者の侵入を許すなんて、咲夜は何をしているのよ」「

そこで美鈴の名前があがらないところが、紅魔館クオリティ。

「すでに上の連中は倒した。もはや紅魔館に残っている者はお前とフランドールだけだ！」

「なんですつて……とにかく、あなたはここで止めるわ。火符」「アグニシヤイン」！

パチュリーは図書館の天井近くまで舞い上がり、こちらにむけてスペルカードを発動する。続けざまに放たれる炎の弾幕が俺を襲う。

「ククッ……かゆい」

「なにー?」

しかし、俺のシールドに当たった弾幕はすべてゅつくり化される。ゅつくりなど当たったところでどうということはないのだ。せいぜい、俺の着物が餡子でベトベトになるくらいの被害である。つて、なにしてくれとんねん!?

「不愉快だッ!」

俺は本棚に手をかけ、ゆ力を上げて一気に押し倒した。それがドミノ倒しのように次々に別の本棚を倒していく。

「あなた、私の本に何を、『ほつ、ほつ、ほつ!』

思惑通りだ。これだけの古本がしまわれた大きな本棚を倒せば、ホコリが舞う。喘息持ちのパチューリーなら発作を起こす原因になる。卑怯? これは戦略なのだよ。

「貧弱ウー・貧弱ウー!」

ゅつくりゲーム!

「げほつ、わ、そんな、まつて、あやああ……

ゅつくりむわよーしてこつてねー!」

パチューリーはゅつくりぱちえとなり、体と分離して落ちて行つた。そして、地面に呑きつけられ破裂。ゅつくりの耐久力では、あの高

度からの落下に耐えられなかつたらし。だが、俺の知つたことではない。

「わて、残るはフランだけか

地下への道のつは割れしよつ。とんでもなく深いところにあるのかと思ひきや、ものの2分であつせりと到着してしまつた。原作では、咲夜さんが能力で空間を変化させていたのだろう。ゆっくり化したことで、地下室までの距離は現実的な長さになつていて。

「そこへるのはだれ？」

「やあ、ぼくは悉て屋ゆとつ。フリーの妖怪やーわれこしても（  
「

フランちゃんは予想通りの口づつ娘だつた。ペリペリしたいペろ  
ペろ。

「あなた、フランの新しいオモチャ？」

「違うよ。オモチャならここにあるよ。ぼく

「ゆくつづくしてこつてねー！」

俺は牢獄の柵越しにゆくつづれみつやをフランに渡す。

「わあーお姉さまそつづつー！」れもうつてここの？

「いいんだよ。それでたくさん遊びなさい」

「ありがとうー。」

「ゆっくりー してこつてねー！」

俺は喜ぶフランに笑顔で答えて牢獄を後にした。にこにこと張り付けた笑顔が、次第に邪悪な笑みに歪んでいく。鼻につくような短い押し殺した笑い声が喉の奥から漏れる。そして、俺は着物の懐からリモコンを取り出す。

「クックック……残念。それは、ゆっくりボムだ」

俺はリモコンのスイッチを押した。

\* \* \*

靈夢は異変調査がてら、紅魔館を訪ねることにした。一応、異変らしきものが起きてることを教えておいた方がいいだろう。まあ、あそこのメイド長ならもうすでに事情を把握しているかもしないが。それならそれで情報収集になる。

「やつほー、美鈴、ちょっと聞きたいことが……え？」

「ゆっくりー してこつてねー！」

「め、美鈴？」

紅魔館の入り口に謎の生物がいた。そいつはどこか美鈴の面影を残しながらも全くの別物。

「」の生首饅頭は、文の新聞に載っていたアレにそっくりだ。美鈴

の体は別にあるが頭部がない。美鈴の首がある生首お化けに変えられてしまったのか。ということは、紅魔館は例の妖怪に襲撃を受けたのか？

「ゆっくりいぬつていつてねー！」

そこに現れた別の生首を見て、靈夢は驚愕する。その顔は紅魔館のメイド長、十六夜咲夜とどことなく似たところがあった。咲夜の体らしきものも転がっている。

「そんな、咲夜までやられたの? じゃあ、紅魔館は……」

嫌な予感がした靈夢は屋敷の中へ入る。一階を探してみたが、レミリアの姿はない。図書館へ行つてみた。

「レミリアー！ パチュリー！ いるのー！ ？」

そのとせ、部屋の一角でなにやら物語がした。靈擺はその音のする方向へ歩を進める。

「パチュリー？」

むしやむしやむしやむしや  
.....

また、生首がいた。今度は三四匹いる。しかし、そのうち一匹はひどい殺され方をしていた。紫髪の生首はビルの屋上から落としたスイカのように叩き割られており、赤髪の生首は側面部に深い傷を負い、中身の黒いドロドロした何かをまき散らして絶命している。

そして、もう一体の金髪の生首はその死んだ一体をむでぼり食つていた。そいつが靈夢の声に気がついてやつへつと、一いつ元振り向く。

「ゅつくりキュッとしてドカーンしていくつてねー！」

「い、いやああああーー！」

その瞳にこめられた狂気に靈夢の脚が震えた。食道からすっぱいものが込み上げてくる。猛烈な吐き気をこらえながら、靈夢は紅魔館を立ち去った。

\* \* \*

紅魔館を後にした俺は、行くあてもなく森をさまよっていた。といふか、迷った。ここはどこだ。

と、そんなときグッドタイミングで一人組の少女に出会った。一人は金髪で赤いリボンをしたヨダレだらだらの少女で、もう一人は緑髪で頭に触角がついた黒マントの少女?だった。

「おお、ルーミアとリグルじゃないか。久しぶり！」

「そーなのかー」

「え? だれですか?」

「俺は俺だあああーーへりゃ、ゅつくりキック！」

「ちよ、おま……

ゅつくりショタつていつてねー！」

リグルを不意打ちのキックでゅつくり化してやった。必殺初見殺

し返し。 めあ ～～

ん？ ルーミアがもの欲しそうな皿で ひづりを見ている。

「なんだ、お前、 いの ゆづり が欲しいのか？」

「そーなのだー」

「じゃあ、 口を開ける。俺が食べさせてやる」

「あーん」

「ソイヤツ！」

俺は全力でルーミアの口の中に ゆづり が詰め込んだ。

「 ゆ、 ゆづり だあああくあ させ て あぶじ 」 と

「 もぐもぐ…… つま いのだー！」

「 そーか、 それはよかつた」

ルーミアは、 ゆづり ぐるの 踊り食い をお皿に召したよつだ。それが最後の晩餐となることも知らず。

「 つーな、 なんなのだー！ 体がおかしいのだー！」

ルーミアの体がぼこぼこと変化し始めた。妖力が顔面に集中し、頭部が異常に膨れ上がる。そして、頭部がぼろりと体から離脱した。

「 ゆづり そーなのかーってつてね！」

馬鹿め。俺以外の者がゆつくりを食した場合、ゆつくり化は免れない。なぜなら、ゆつくりには、ゆつくりウイルスを大量に保有しており、それに感染したもののはゆつくりになってしまつからだ。俺はゆつくりるーみあを頭に乗せて、新たな敵を求める旅に出た。あ、道を聞けばよかつた。

\* \* \*

しばらく歩いていると、いい匂いがしてきた。

そのおいしそうな匂いにつられてふらりとやつて来たところは、ヤツメウナギ屋台だ。確か、ミスティア・ローレライだったか。

「よー、みすらー。ちんちん!」

「ふつー。いきなりなんですか!」

放送禁止用語ではない。よつて、伏字にする必要もない。よし、連呼してやる!ー

「ちんちんー!ちんちんー!」

「やめてくださいー!小学生ですか!」

「ただの挨拶だ。魔法の言葉だ。気にするな」

俺は屋台の椅子に座り、隣の椅子にゆつくりるーみあを置く。さつきから俺の頭をガジガジしてくるんだよな。おかげで俺の頭が餡子でぐちゃぐちゃじやねえか。って、今の俺、餡子まみれじやねえかーどうなつてんだよ、幻想郷。

「ヤツメウナギ、一丁」

「は、はい。いいですけど、もつ言わないでくださいね……」

「う言つてみすちーはつなぎを焼く。女将さんみすちーはいねえ。ぜひ、嫁に来てほしい。」

「俺のために、毎朝ヤツメウナギを焼いてくれませんか」

「プロポーズみたいに言わないでください……」

「と、うひで、俺はヤツメウナギに替わる新たな食材の可能性に気づいた」

「と、唐突ですね」

「その名も、ゆつくづ。そうだ、こいつを見てくれ

俺はゆつくづるーみあを、みすちーに見せる。そして、片手の握力だけでそれを握りつぶした。

メシャプグチユジユバドロオツ！

「ゆつくづるーなあやああああーーー！」

「あやああああーー？」

飛び散る餡子。もうANKO。それをみすちーに見せつけ、適当にちぎつたゆつくづを食べる。

「ハモジー、ビツだ、みすちー。君も食べてみないか？」

「いやですー、絶対いやですー。」

「なんだと、てめえー、俺のゆつくりが食えねえってのかーー、ああんーー？」

絡み酒ならぬ、絡みゆつくり。俺はゆつくりーみあの餡子をヤツメウナギの生簀に放り込む。すると、ヤツメウナギがゆつくり化した。

「」「ゆつくりしてこつてねー。」「

「ひ、ひどいー、私のヤツメウナギになんて」とかねんですかーー？もつ怒りました！スペルカードで勝負ですー！」

「こいだらうー、ゆ符」「ゆつくりして逝つてねー。」

「ちよつと、屋台から出るまで少し待つてください……

ゆつくりしてこつてねー。」

屋台の中にいたため、身動きが取れなかつたみすちーに容赦ない弾幕の雨を降らせた。俺、鬼畜。

「はあー、異変解決の前に腹」しらべでもしていいか

と、そのときみすちーの屋台に誰かが近づいてきた。あれは魔女つ娘、魔理沙だ。ヤツメウナギを食べに来たのか。

俺はみすちーの代わりに屋台に入る。ゆつくりみすていあは、力

ウンターの端に置いた。

「おーい、ミステイア、うなぎ出してくれ……あれ？ あんた、だれ？」

「俺はアルバイトだよ」

「へー、そう」

魔理沙は特に疑つこともなく、席についた。

「つわーなんだこりゃ、けやんと掃除しちよ。席が餡子でべちやべちやだぜー！」

「サーセンwww」

俺の餡子で真っ黒に染め上げてやるよー……！」こつ元から白黒だつた。

「それよつもなやく飯を出してくれ。よつと急いでるんだ

「そりやまだどうして？」

「実はまた異変が起きたらしい。なんでも今度の異変はヤバイらしいぜ。紅魔館の連中がやられたそうだ」

「へえ、あの紅魔館が。物騒な世の中になつたものですねえ

俺はコップをキュッキュッと磨きながら魔理沙に相槌を打つ。

「やつね、話は変わりますが俺、魔理沙さんのファンなんです  
よ」

「え、ファン？」

「そうなんです。魔理沙さんのあの派手な魔法をぶつ放すところ  
がたまらない！カッコイイ！はあはあ」

「そ、そ、うか」

若干、引き気味だが、ほめられたことはうれしそうだ。まんざ  
らでもない表情をしている。

「そこで、ぜひ魔理沙さんの八卦炉を一度でいいから見てみたい  
と思ってたんです。お願いします！八卦炉、見せて！」

「えー、やだよ」

「そこを何とか一つな重タダにしますからー」

タダという響きにつられたのか、魔理沙は躊躇したものの、しぶ  
しぶ八卦炉を取り出してくれた。

「しようがないなあ。見せるだけだからなー？」

「おおーーーこれが八卦炉かああー！」

「ちよ、おい、こひー返せー。」

俺は八卦炉を魔理沙の手から奪つて眺める。魔理沙は身を乗り出

して、俺から八卦炉を奪い返す。だが、もう遅い。

「あつたく、見世物じゃないんだぞ……って、なんじや「じりやああーー?」

「ゆつ卦炉です」

すでに原形をとじめていない生首饅頭。魔理沙の魔法の源、八卦炉もこうなつてしまえばただのガラクタだ。ゆ力がなければ扱うことはできない。

「くつモー、じんなんじや魔法使えねええー」

「あつひやつひやつひやつひや！腹筋崩壊ーー！」

必死にゆつ卦炉を振るつ魔理沙を見て、大爆笑する俺。魔理沙は正々しげにこちらを見てくる。

「わて、では弾幕合戦だ、魔理沙！正々堂々、勝負しろー！」

「なにが正々堂々だーお前、卑怯すぎだろー！」

「問答無用ーゆつづームー！」

「いんなやられ方するなんて、うわあああああー！」

「ゆつづりんちー……キノコついてねー！」

幻想郷のハーレムの主もの様か。だが、どうやら俺の素晴らしい活躍は異変としてとらえられているようだ。主人公級の奴らを敵

に回したことになる。幸いにして魔理沙は俺の存在に気づく前に倒すことができた。しかし、俺の所業がバレるのも時間の問題だろ。そして、一番の問題は幻想郷最強のあの妖怪だ。もしかしたら、すでにこの現場をのぞき見されているのではないか？

「そこにいるんだろ、出てこいよ、スキマババア」

「ずいぶんと威勢のいい妖怪ね。よほど死にたいと見えるわ」

「アッキイイイイイイ！」

俺のノミの心臓が縮みあがる。まさか、本当にいたとは。スキマ妖怪、八雲紫。「境界を操る程度の能力」をもつ完璧超人だ。俺のゆ力をもつてしても、苦戦することは必至。

「ど、どこから見ていたんだ？」

「わあ、どこからでしょうね？」

尋常ではない妖力だ。幻想郷の理、つまり人とそうでない者との共存をだれよりも尊重するゆかりん（ゆうかりんではない）にとって、俺はその秩序を乱す者に他ならない。

「まさかこれほどまでに厄介な妖怪だとは思いもしなかったわ。おいたが過ぎたわね。消えなさい」

俺の足元にスキマが開く。これに飲み込まれればどうなるか、入つてみた者にしかわからない。だが、それは読んでいた手だぜ！

「どうしー」

俺は飛び上がってスキマを蹴った。普通ならそんなことはできな  
いが、俺は普通じゃない。蹴られたスキマは中から餡子をぶちまけ  
た。

「なんですかー。」

ゆかりんは自分の近くにスキマを開き、その中に入り込むとする。  
しかし、そこに突っ込んだ手は、異様な感触に包まれた。驚いて引  
き抜くと、紫の手袋には餡子がべつたりと付着している。

「スキマをゆっくの口に変えてやったぜ」

いつもなら無数の目が見えるはずのスキマの中は、餡子でギッシ  
リ。これではスキマに逃げ込むことすらできない。ゆかりんはうとう  
たり！

「うー、なんてヤツ……」

ゆかりんは空に飛びあがり、弾幕を撃つてきた。

「はーはーはー、俺には弾幕などかんべーやつーー。」

ゆかりんの弾幕が俺のシールドを突破した。なぜだー？ ゆっくり  
シールドは確かに展開されている。このシールドを通したものほど  
なんものでもゆっくりになるはずだ。

しかし、ゆかりんの妖力は俺のゆ力を上回っていたのだ。半分ゆ  
っくり化された弾幕は、威力を落としているものの、俺にダメージ  
を「与えてくる。」

「い、痛てえ！ なんで俺の能力が通用しないー？ くそがーなめや

がつてええーー！」

俺の弾幕スキルはかなり低い。歴戦の勇士であるゆかりんとともにやりあつても勝てるはずがない。俺が反撃に放つたゆっくりビームも、危なげなく避けられている。今までの敵はすべて不意打ちで倒してきたが、今回はそうはいかなかつた。

「ゆゆ符」「ゆつくりビーム大乱射」！

スペルカードも使つた。しかし、俺の方がオサレ氣味だ。間違えた。押され氣味だ。なんてえげつない弾幕の雨だ。こんなんルナティックレベルじゃねえか。初心者なめんじゃねえ。

「弾幕勝負では大したことないような。おとなしく降参しなさい

「降参したら許してくれるか？」

「ええ、苦しまず楽になれるわよ？」

「ははは……そんなんいやじやあああーー！」

ゆかりんの弾幕がきつくなつてきた。これ以上はシールドがもたない。ぶつかつてくるゆつくりから飛び散る餡子で、俺の体はボドボドダ。いや、「冗談ではなくまさい。

くそ、BBAのやつマジで手加減がねえ。勝ち誇つた笑顔しやがつて、くそくそくそー！

「だがな、俺の能力なめんじゃねえぞ……ほえびらかかしてやるよおおおーー！」

ゆゆゆ符「真・ゆつくりして逝つてね!」

「何? さっきのスペカと全く同じ弾幕に見えるわよ? 」 こんなもので私を止めるとはできな……え?」

俺の弾幕はゅつくりビームだ。このビームに当たつたモノはなんでもゅつくりになる。そして、俺はそのビームをこの戦いで数え切れないので撃つた。そのビームはゅかりんに当たらなかつたわけだが、無駄になつたわけではない。

その声は地上から聞こえた。ゅつくりビームによつてゅつくりになつた、ゅつくり木、ゅつくり草、ゅつくり石、ゅつくり妖精、ゅつくりりりーほわいとなびが俺のためにゅつくりビームを撃つて援護してくれたのだ。一つ一つのビームは大した脅威ではない。しかし、それが無数に集まつて、攻略不能の大弾幕となる。

その隙間ない絨毯爆撃がゆかりんに襲いかかる。いかにスキマ妖怪といえど、スキマを封じられた今、この弾幕から抜け出すことなどできない。

「勝負あつたな、スキマBBAああああああああ！－－氏ねえええええ

地上と空からの十字掃射に、ゆかりんは飲み込まれた。

俺は力尽き、地上に落ちていく。下にいたゆづくりたちが俺を受け止めてくれた。体中、傷だらけだ。あと餡子だらけだ。もう動く気力もない。

俺はゆかりんがいた場所に目を向ける。ゲームにより浴びせられ

た光が消え去ったとき、そこには誰もいなかつた。

「なん……だと……！？」

ゆつくりゆかりんがいない。どうこうことだ？ ま、まさかスキマから逃げたのか？ あの大量の餡子の中に身を投じたというのか。信じられん。なんてやつだ。

しかし、餡子スキマの中の餡子密度はとてつもない。一度入れば抜け出すことは容易ではないはずだ。長居すればゆつくりウイルスに冒され、ゆつくり化する。すなわち事実上、俺がゆかりんを倒したことには違いない。ゆつくりゆかりんの姿を拝めなかつたことは残念だが、俺は生きているといつ喜びを噛みしめることができ、満足だつた。

\* \* \*

俺は傷ついた体を引きずりながら歩いた。まつたく、あのババアのせいでひどい目にあつたぜ。どこか、ゆつくり体を休められる場所を探さなければ。

そんなとき、俺の前に粗末な服を着た一人の男の子が現れた。こんなキャラは原作で見たことがない。里の人間だらうか。

子どもは俺のことをみて、ひどく怯えたように驚き、逃げようとすると、そこにもうひとり、別の人影が現れた。

「いじらーちゃんとクラスの皆と一緒にいないとダメじゃないか。一人で歩いたら危ないだろ？ この辺りは妖怪が出るかもしれないのだから……むつーそこにはだれだ！」

その人は上白沢慧音だった。あの家っぽい帽子はまさしくけーねだ。多分、子どもは寺子屋の生徒だろ？ 遠足にでも来ていたのだ

るうか。

けーねは俺のことをすぐに妖怪だと見抜いたようだ。警戒しているが、俺が傷だらけだということにも気づいたらしい。

「待つてください！体が動かないんです！助けてください！」

俺は捨てられた仔猫のような目でけーねに懇願する。

「……妖怪と言えどもここまで見捨てては寝覚めが悪いな。しかたない、里まで運ぼう」

やつた！けーね、ありがとう…

俺はけーねにおんぶされて、里まで移動した。意外と里は近いところにあり、すぐに行けーねの家に到着。

「今、永遠亭の薬を塗つてやるから大人しくしていい」

さすが、けーねはいい人だ。永琳特製の薬は俺のHPを瞬く間に回復してくれた。

「本当にありがとうございます。この恩は一生忘れません！」

「そうか、里の人間に悪さをするんじゃないぞ」

「もちろんです！あ、俺のことを見つけてくれた男の子にもお礼が言いたいのですが……」

「その心がけは結構だが、お前は妖怪だからなあ。私から伝えておくよ」

「いいえ！直接、お礼が言いたいのです！」

「ん、そうか。まあ、お前は良い妖怪のようだし、かまわないだろ。さつきの子なら寺子屋の運動場にいるはずだ。行ってきなさい！」

「はい！行つてきます！」

俺はけーねの家を飛び出し、寺子屋に向かった。運動場には多くの子どもたちが集まつて遊んでいる。

「みんな、ちゅーもーくー！」

俺は朝礼台に立つて子どもたちに呼びかけた。人間に近い姿をしているためか、子どもたちは警戒心もなくこちらに寄つてくれる。

「俺は饅頭妖怪、悉皆屋ゆとりだ！君たちが傷ついた俺を森で発見してくれたおかげで、俺は死なずに済んだ！そこで君たちに俺の饅頭を御馳走したい！」

子どもたちは俺が妖怪であるとわかり、少し怖がつてはいるようだが、饅頭をやると言われて心が動いたようだ。逃げる様子はない。

「わあ、みんな食べててくれ！俺が丹精込めて作つた饅頭だー！うまいぞー！」

\* \* \*

「けーね先生！大変です！」

俺はけーねの家を再び訪れた。大声でけーねを呼びながら戸を開

ける。

「お前はやつきの妖怪じゃないか。どうしたんだ、血相を変えて？」

「子どもたちが……子どもたちが！」

肩で息をしながら冷や汗を流して怒鳴りこんできた俺を見て、けーねの顔色が変わった。すぐに家を飛び出し、寺子屋へ向かう。俺もその後をついて行く。

寺子屋の運動場につくと、そこには想像を絶する光景があった。

「な、なんだこれは……！」

「……やつしてってねー！」

絶句するけーね。運動場に転がるいくつもの生首饅頭。しかし、その顔の面影をけーねが忘れるはずがない。それはすべて、彼女が寺子屋で授業しているクラスの子どもたちだった。

果然とするけーねの後ろで、俺は笑いをこらえきれない。なるほど、夜神用の気持ちが今ならわかる！

俺はそつとけーねの背中に向けて手を掲げる。

「やつしてー！」

「……つー」

しかし、けーねは殺氣を感じ取ったのか、背後から撃つたのにもかかわらずビームをかわした。そのばずれたビームは運動場の鉄棒に当たつて、鉄棒がゆっくり鉄棒に変わる。

「これは、お前の仕業か……」「

一  
げひつ、  
げひげひつ！そのと  
りつ！

——この下種か！！」

「一ねの妖力が爆発的に高まる。オーラで髪がなびいてるぞ。」  
「んだけキレてんだ? 今にも弾幕を撃つべきそな勢いだ。」

「お、と、うかつに弾幕は撃たない方がいいや？」

今さら命乞いか 笑わせるなー！」

全然、笑ってないけーねか弾幕をふつ放した。それに合わせて俺は運動場のゆつくりたちに呼びかける。

みんな、俺を守れ！」

「」「」「」

ゆづくり生徒たちが俺の前に盾のよつて立ち塞がつた。名付けて、ゆづくりシールドっ！

ブジユギヤジユバドチャグチャズパパドパペゴヘジラズチャ！！

「おまえのことは、おまえの手で決めておこう。」

「ああ！私の生徒たちが！」

「どうだ？自分の弾幕で愛する子供たちを庇らせた感覚は？」

「あ、あまあああ……どうしてお前のよつた妖怪が里の結界を越えられたんだ！？」

「あなた。どうやのスキマ妖怪が里寝でもしてんじゃないのか？」

里には人に害をなす妖怪が入つてこられないように結界が施されている。これはハ雲紫が作ったものだ。ゆかりんがゆっくり化した今、この里を守る結界は機能していない。

「どうしてだ……お前は深い傷を負つていたところを人間に助けられたのだと？どうしてこんな仕打ちができるー？」

「おいおい、俺が人間に助けられただつて？馬鹿いつちやいけないよ。俺は自分が助かるように身の振るまいを取り繕つただけさ！ げらげらげらげらげらー！」

けーねは憤怒の形相で怒りをあらわにするが、生徒を盾にどうらっては攻撃することができなかつた。

「いいねえ、その顔……最高にしびれるぜ。ああ、お前たち。大好きなけーね先生が来たぞ。行けえいー骨の髄までむしゃぶりつくしてやれー！」

「「「ゆつくつしていってねー」」

ゆつくつたちがけーねを取り囲んだ。空を飛べば簡単に逃げられ

る。しかし、ゆつくりたちの顔を見ていると、教え子との思い出が走馬灯のように思い起こされ、正常な思考ができなくなっていた。

「ああ……ああああ……！」

“けーね先生！”“けーね先生！”

「ゆつくりしていつてね！」

「やめろ、来るな……くるな、う、うわあああああ……！」

\* \* \*

今や幻想郷のいろいろな場所に、「生首饅頭ゆつくり」が発生している。ゆつくり自体はとても弱い生物だが、他の生物や妖怪がそれを食べると、その捕食者がゆつくり化してしまうのだ。そのせいで、被害が拡大していた。

簡単にかたがつくだろうと思つていた異変が、かなり悪化した状態まで進んでしまった。はやく解決しなければ幻想郷がゆつくりだらけになってしまつ。

靈夢は次々と襲いかかつてくるゆつくり妖怪たちを撃ち落としながら、原因の妖怪を探し回っていた。それは人里に近いところを探しているときに起つた。

「なに？ 里の様子が変ね」

もつと近づいてよく見ると、人里がとんでもないことになっていた。ゆつくりが氾濫している。人々はゆつくりから逃げ回り、捕まつた者はゆつくりに群がられている。そんな中、ゆつくりに追われる一人の少女が目に入った。

「阿求！」

稗田阿求だ。靈夢は群がるゆっくりたちを打ち抜いて、阿求のところへ降りる。

「靈夢さん！」

「いつたい何が起つたの？」「ここが、ビックリしたのよ」

「私にもよくわかりません。氣づいた時にほほの妖怪が里中に蔓延して……ぐつ！」

阿求は足を抑えてしゃくった。

「どこか怪我しててるのー？」

阿求が着物の裾をまぐると、足に餡子が付着していた。

「……氣をつけてください。あの妖怪に躊躇まれると餡子がくっつきます。その餡子に触れてしまつとう、う、うああああーーー！」

「阿求ーー？」

阿求の頭が膨張し、ゆっくり化していく。そして、体から離れたゆっくりあきゅうが靈夢に襲いかかった。バイオ・ゆザード！

「ゆくつあつめやんつていつてねー！」

ヒツのヒトヒ反応できなかつた靈夢はゆくつての攻撃を許して

しまった。靈夢のもつとも無防備な場所に噛みついてくる。

「！」こつ私の脇に噛みつきやがった！

脇にこびりつく餡子。靈夢は思わずゆっくりあきゅうをはたき落した。地面にぶつかってつぶれるゆっくり。靈夢は氣味の悪いものでも見るよつよつに自分の脇についた餡子を手で払いのける。

「うええ……」

しかし、阿求の話が本当ならこれで靈夢もゆっくり化してしまうことになる。あんな姿になるなんて耐えられない。どうにかして治すことはできないものか。

そんなとき、ゆっくりたちから逃げまじり、もう一人の哀れな獲物。というか、ウサギちゃんがいた。

「鈴仙じゃない。こんなところで何してるのよ

「はつ、靈夢さん！実は幻想郷に新種の生物が大量発生したという噂を聞いて、師匠が新しい薬の材料になるのではないかといふことで、採取を依頼されたのです」

鈴仙・優暁華院・イナバ。永遠亭のウサギだ。偏屈拘いの幻想郷の中で、割と珍しい常識人である。

しかし、そこで思いついた。永琳の薬ならゆっくり病を治せるのではないか。

「そうだー永遠亭に行こう！」

「え？急にびくし、ああああああーー！」

靈夢は迷いの竹林を目指して全速力で空をかつとんだ。ついでに、うどんげも連れて。

\* \* \*

俺は妖怪の山と思わしき場所にいた。

ちょうど目の前に河童の河城にとりと厄神の鍵山雛がいる。ここには幻想郷の中でも会いたかった妖怪の一人だ。なぜなら、俺と名前が似ているから。あと、古明地さとりとも会いたい。このスリーショットで写真とりたい。接点、からつきしないけどな。

二人に見つからぬように物影に隠れて様子をうかがつた。にとりが何かの発明品を作り、雛がそれを手伝わされているようだ。

「ねえ、ほんとにうまくいくの、これ？」

「大丈夫だつて。絶対、うまくいくつて」

なにやら、ベルトコンベアのようなマシンの中に雛がセットされている。

「よし、じゃあ雛、回つて！」

「」とりの指示で、雛がぐるぐる回り出した。その回転を動力としているのか、ベルトコンベアも動き出す。

「より、次はお寿司にさつて！」

雛は回転しながら器用に寿司を握り始めた。その寿司をベルトコンベアの上を流れる皿に乗せていく。

「やつたよ！完成だよ！」

かーつぱかつぱ、かあつぱの、かあつぱずし  
ゅつくりビーム！

「「さやああああー！？」」

こいつらは何をしているんだ。そのネタをまさか本氣でやるとは、  
おそれいつたぜ。これはゅつくりにして正解だわ。

「ゅつくりやくつていてね！」

「ゅつくりおねだんいじょうしていてね！」

それにしても回転寿司か。最近食つてなかつたな。食べていくか。  
……カツパ巻きしかねえ。しけてんなあ。

「しかもマズッ！-！」

厄い味がした。

\* \* \*

妖怪の山の支配者といえば、鳥天狗である。その組織力はかなり  
のもので、ネットワークは広大。この山にいる限り、鳥天狗の目か  
ら逃れることはできないと言つても過言ではない。かく言つ俺も、  
山をパトロールする哨戒天狗に見つかってしまった。

「そこあなたの、止まりなさい！両手を上げて手を頭の後ろで組み、背中をこすらに向けなさい！」

そこまで言つか。この鳥天狗は犬走柵。天狗のくせに犬耳犬シップがある大変もふもふした妖怪である。

「ま、待ってくれ、俺はしがないフリーの妖怪、悉皆屋ゆとり！怪しいものではないよ」

「しうじうじう嘘を。今回の異変、あなたの仕業でしょ？…ちやんと調べはついています」

ばれてーら。

柵は新聞らしいものをこすらに放り投げた。それを覗き込むと、俺がゆつくりゆうかをお召し上がりになる瞬間がばつちり写されてい。『文々。新聞』……射命丸文か。あの盗撮魔め。

「こんな大それた異変を起こす妖怪、どんなものかと思つていれば、何のことはない小妖怪ですか。そんな馬鹿みたいな刺繡がついた着物を着て」

「うつせーよ…俺だつて好きで着てんじゃねえ！」

「こんなゆつくりデザイン、俺も願い下げだ。幻想郷ゆつくり化計画を完遂した後は、もつとけやんとした服を着るつもりである。

「妖怪を見た田で判断すると痛い田を見るぜ？おつおつ嬢ちゃん  
弾幕勝負だ！」

「いいでしょう。負ける気はしません」

「だが、その前にハンデをくれ！」

「は？」

俺は柾に土下座する。それはもうすがすがしいほどにきれいな土下座だった。

「見ての通り、俺は弱い。妖力なんてアリンコ並みだ。だからハンデをくれ！一発、一発だけでいい。俺の通常弾を避けずにくらうてくれないか？」

「何をとぼけたことを言つていいのですか？そんなことをしてやる義理はありません」

柾は冷たい視線を俺に浴びせてくる。もみじもみもみくせしやがつて、もむぞこいら。

「なんだと！？弱い者いじめして楽しいかよ！？」

「弱肉強食がこの山の掟です」

「戦いに身を置くものならわかるだろ？ 戦士の一拳手一投足、全力でぶつかりあい拮抗する力と力、一寸先に待ち構えているかもしれない死への恐怖！それこそが勝負の醍醐味だらが！弾幕合戦は単なる力の誇示じやない。魅せるんだよ！美しく空を舞い、色とりどりの光弾を放ち、ときには勇壮と敵を圧倒し、ときに優雅に攻撃をかわす。それが……弾幕なんじやないのか？」

キリッ！

「だ、だからなんですか？」

「なんですかだとおおーーお前は弾幕の戦士として最も大切なことがわかつてない！俺は小妖怪として、とてもお前に敵うような力は持つていない。だが！その絶対的な力の差を乗り越えて、お前に戦いを挑もうとする勇敢さ！わかるか！たとえるなら、お前が天魔に刃向かうようなものだ！そんなこと、お前に出来るか！？」

「いや、いや、それは無理ですが……」

「そうだろう！俺はそれほどの強敵を前にしてひります、戦おうとしているのだ！しかしだ。お前は俺の百万倍は強い。その戦力差は天地がひっくりかえっても埋められないだろう。ただ、その絶望的な状況の中で光明を見出すべく、俺はハンデを求めたのだ！」

「いや、それとこれとは……」

「ハンデと言つても妖怪史上最弱のこの俺の通常弾を一発だけくらうといふことをいなものだ！そんなことをしたところで、お前にダメージを与えることなどできないことは分かっている。いや、お前の全身を包む強者のオーラによって、お前は自然体で構えているつもりでも、俺の脆弱な通常弾はそのオーラにかき消されてしまうかもしれない。それどころか、むしろ跳ね返されて、逆に俺が被弾し、致命的な重症を負うかもしれない。でもな、俺はその一発にすべての希望をかけているんだよ！お前という強大な存在に、矮小でゴミクズ以下の力しか持たない俺が立ち向かうためには、そのたつた一つの希望が必要なんだ！無意味なことだつてのは、わかつてゐる。こんなことをしたところで俺はお前には勝てない。ただ、俺に戦う勇気をくれないか？それともお前は、ありつたけの勇気を振り絞つて

俺は土下座したまま泣いた。桺は困惑氣味に涙と鼻水でぐちゃぐちゃになつた俺の顔を見てくる。ここまで自分を貶める妖怪がかつて、この妖怪の山にいただろつか。そのあまりの情けなさっぷりに、桺は憐憫の感情を禁じえないのであつ。深くため息をつく。

「はあ……わかりました。そこまで言われては、慈悲に戰つ」  
ともできません。そのハンデ、認めましょう」

「えぐつ、えぐつ、ほんどう?」

「はい、本当ですよ。だからまずは涙をふきなさい」

椿は親切にもハンカチを渡してくれた。俺は涙と鼻水を拭いて、さらにもう一回鼻をかんでから椿に返す。

「じゃ、じゃあ、一発だけ当てるよへビーがこい？痛くなこへり」と叫んでいた。

「でもここですから、気にやさしくしなれ」

アーティスト一覧

「おひべつもみひてこつこね！」

「……えへ、えへえへ」

ぶああああああかがああああー！泣き落として「ロッ」と騙されやがつて！幼女だからって中身は真っ黒けの腹黒妖怪なんだよー。やまあ「もみじざまあ」

「美しく空を舞い、色とりどりの光弾を放ち、ときに勇壮と敵を圧倒し、ときに優雅に攻撃をかわす？それが弾幕の醍醐味？違うねッ！勝てばよからうなのだああー！」

「おひくつもみひこひね！」

俺は自分の着物を脱いで全裸になると、柵の服を脱がせ始める。別に今から柵とめくるめくわんわんタイムが始まるわけではない。服を着替えるのだ。指名手配されている以上、変装した方が得策だ。ここは犬走柵になりきろうではないか。

しかし、桜になりきるためには犬耳が必須。どうしたものか。

「おひくつもみひこひね！」

セヒで、おひくもみじが田にとまる。俺は、つかつかとおひく  
りに近づき、その犬耳を手でつかんだ。

ブチイツ！

「 ゆぐああああああああああああああ！」

ゆつくりもみじから拝借した犬耳を頭にセツトする。餡子を接着剤にしたのでずれ落ちないぞ。

……うん、無理があるな。桜の妹と名乗ることにしよう。

\* \* \*

「 お、おおお重めえええ！！」

俺は桜の剣を持って山を登つたのだが、これがまた重い。鉄の塊なのだから当たり前なのだ。こんなものぶんぶん振り回す方がおかしいのだ。重すぎて飛行するのも一苦労だ。

しかし、桜の妹という設定なのだから、別に剣を持つている必要はないのではないか。そのことに気づいたのは、守矢神社につけたときだった。

「 くそがつ！ 重労働させてんじやねえぞコラ！」

でもせっかくここまでつってきたので、捨てるのもなんだかもつたひない気がした。そうだ。神社にお供えしよう。そうすれば御利益ももられて一石二鳥だ。ボクつてなんて信心深い妖怪なんだろう。

「 どつせい！」

賽銭箱に剣を突っ込む。軽く箱が壊れたが、気にしない。

「ふう……いい仕事した」

「あ、あの、参拝の方ですか？」

物音を聞きつけた巫女がこちらにやってきた。 東風谷早苗、緑色の現人神だ。ああ、ナメック星人ではないよ。

「 そうなのです。私は犬走桜の妹の桜子と言います！」

「はあ、梅子さんですか」と、頭のそれなんですか……」

大臣のことですか？かわいしてしょ？」

「取れますよ」

さわってみると、左耳が取れていた。ガッデム。振り返ると、神社の参道にぽつんと落ちている犬耳の片方。

「子どものころから、左耳はよく取れるんですよ、あはははは

!

「そ、そ、うなんですか」

早苗さんはひきつった笑顔を浮かべている。まずい、これは警戒されているな。緊張をほぐすために、スキンシップを図らなければ。

「唐突ですが、おっぱいをもませてください」

「本当に唐突ですね！？」

「私は犬走家に代々伝わるおっぱいもみもみマスター免許監の腕前を持つています」

「どう考へても嘘ですねー? とかそれは何の称号ですか! ?」

「乳癌の検診です」

「路線を変えてもダメです! 初対面ですよー?」

「ぐちぐちひみせえんだよ。信者様がもみてえって言つてんだからおっぱい出せばいいんだよ。信仰しねえぞ?」

「なんで神様より偉そつなんですかー? つて、あやーやめてください!」

俺はかまわず早苗さんの巫女服の中に手を侵入させる。まあ、なかなかのものをお持ちですな。

「あ、あうーー、いい加減にしないと怒りますよー?」

「幻想郷では常識にとらわれてはいけない!」

ドーン!

早苗さんと言えばこのフレーズである。数々のHロ同人で使い古されたこの展開に、逆らうことはできません。

「幻想郷の常識は現実の非常識。そしてその逆も然り」

「な、なるほど、神様のおっぱいをもむ信者とこう非常識も、こ

の幻想郷では常識だということですね……ならば、しかたありませ  
ん、好きなだけ私の胸をもんぐださ……つて、そんなわけあるか  
あああーっ！」

見事な乗りツツ「ミミだ。さすがに、生の早苗さんは一味違う。し  
かし、体が密着した状態にある今、俺の攻撃をかわすことはできな  
い。

ゆつくづビーム！

「うわー！なにをする、やめ……

ゆつくづカラーッ！

ゆつくづさなえの出来上がりだ。ゆ力の前では神と言えど無力。  
妖怪の山の厄神で実証済みだ。秋姉妹？だれそれ？

「早苗ー、なんか叫んでたけど大丈夫ー？」

と、そこに口り神ケロちゃんこと、洩矢諷訪子がやつてきた。早  
苗の変わり果てた姿を見て、仰天している。

「な、なんだお前は！？早苗に何をした！？」

「どうした、何事だ？」

さりにガンキヤノンハ坂神奈子が声につられて現れた。

「あいつが早苗を変な生き物に変えちゃったんだ！」

「それは本当かー？」

「一人はものす」<sup>1</sup>に神力で俺を威嚇してくる。普段はおちやらけている奴らだが、守矢神社はかなりの信仰力を得ている。その一柱の祀神と一度に対峙すれば、その威圧は途方もないプレッシャーとなつた。

「さすがは守矢の神、向き合つているだけで冷や汗が止まらないぜ。だが、わかっているだろ? 俺の手の中にこいつがいるってことを」

「ゆつくづくアカワードーしていつてねー」

ゆつくづかなえを人質にとられては、俺に手を出すことはできなはずだ。案の定、諏訪子と神奈子は苦虫をかみつぶしたような顔で硬直している。

「よし、お前ら、同士討ちじゃ」

「はあー? 何を馬鹿なことをー」

「はやく早苗を開放しろー! さもなければ、お前に地獄を見せてやるー!」

やれやれ。どうやら、自分の立場つてものがわかつていないらしないな。

俺はゆつくづかなえを地面に置いた。もちろん、開放する気はない。

「俺の言つとおりあるんだ。はやくしないと、サッカーボール

「よし、さあやがれ。」

ゆづくりにとつては、ただの蹴りと言つても瀕死に追いやる破壊力になりえる。ずりずり地面をつま先で削るように足を滑らせながら、ゆづくりсанの手前まで迫り、近づいたところで一気に思いつきり蹴りあげた。

蹴りの威力は申し分なかつた。しかし、踏ん張りすぎた反動で軌道がずれ、ゆつくりさなえの頭頂部を足がかすめる形になつてしまつた。そのせいで、ゆつくりさなえの頭皮がべらんと剥けて、中の餡子が見えている。

「あーあ、見てみろよ。天下の現人神、風祝の東風谷早苗さんの頭が力パ力パしちまつたじやねえか。これじや、搭乗ハツチだぜ」

力パ力パ、力パ力パ

「ゆ、ゆつくり2Pカラーしていつてね……」

「もうみてらんなよ、やめたげええーー。」

「次は何をしてやうか。口の中に手を突っ込んで中の餡子をひきすりだそうか？それとも賽銭箱にダンクショートして、ショレッダーにかけたみたいにスライスするのがいいかな？ほおら、こいつ

をいたぶる手段はいくらでもあるんだ。俺の言ひどめりにしきねー。」

涙目で頭をカパカパされるゆっくりさんを見て、二人は決心がついたようだ。一人で向かい合うようにして立つ。

「全力のスペルカードをお互いにぶつけあえ！もちろん避けたり、ガードしたりすんじゃねえぞ！諏訪子、お前はミシャグジさまを撃て！神奈子、お前は神が歩かれた御神渡りだ！」

「なんで」いつ、あたしらのスペルカード知つてんだ！？」

Wikiの力。

「しかたないよ、神奈子。早苗のためだ」

「諏訪子、死ぬなよ」

票符「ミシヤグジセモ」

神符「神が歩かれた御神渡り」

弾幕つてレベルじゃねえぞ。こんなバケモノどもと正面切つて戦えるか。いやあ、ピカピカ光る弾幕はきれいだねい！せいぜい、俺の田を楽しませてくれたまえ！

弾幕が終了したとき、その後にはボロ雑巾のような一人の神が倒れ伏していた。俺は無力化した一人にゆっくりビームを浴びせる。

「ゆうくりケロっていつてね！」

「おお、ベニマル君、こいつでいいでね！」

「ほーら、お前たち。じはんだよー」

「おへりこへロケじへいねー」

「あいべつどす」っていつてね。」

「母、お食いいかが」。母は「おや、おや」と抱き合った。

モリモリとごはんを食べるゆうくりたち。たくさん食べて、大きくなれ。

たが、その樂しいゆきぐり因縁を邪魔する景が、空にあつた。

大

チュインチュイン！

何かが俺の背後ではじける音がすると同時に、背中に激痛が走つ。

た。

慌てて振り返れば、そこにいたのは幻想郷最強の紅白巫女、博麗

靈夢……あれ？幻想郷で何人、最強かいるんだ？

の幻想郷ゆつくり化計画を阻むものはいなくなるだろ？

「いきなり後ろから狙い撃ちするとは、卑怯だぞ！」

「あんたに言われたくないわよ」

「もつとも！」

「好き勝手に暴れてくれたようだけど、そろそろ年貢の納め時よ」

「ふつふつふ、俺の年貢を受け取つちまつたら、大変なことになるぜえ？」

「ゆ符」「ゆづくつして逝つてね！」

前置きもなく発動したスペルカードの弾幕を、靈夢は鮮やかな身のこなしでかわしていく。総合的な飛行能力はずば抜けていた。もはや当たるとこひが想像できない。ジヒラシイイイイー！！

「なんのひねりもない単調な弾幕ね。あぐびができるわ

「……てめえは、俺を怒らせた」

靈夢の能力は「空を飛ぶ程度の能力」。その能力に俺のゆ力を干渉させ、空を飛べなくしてやる！

しかし、俺が自分の能力を使おうとした矢先、靈夢は踵を返して逃げ出した。俺の強さに恐れをなしたか！

「待ちやがれ！」

# 俺は靈夢の後を追う。

それにしても、とんでもない飛行スピードだ。俺の飛行術では、見失わないように追いつくだけで一苦労だ。だが、ここで逃がしては俺のプライドが許さねえ。必死で後を追いかけた。

靈夢が向かっている先は竹林だ。そこは迷いの竹林か。どうに逃げようとも無駄だ。ゆづくれいむにして博麗神社の鳥居に吊るしてやるー。

亭だろ、う。

「ぜえ、はあ、よひやく、はあ、観念、ぜえ、したか、はあー。」

ちくしょう息があがつてまともにしゃべれん。靈夢の奴、ちょこ  
まかと逃げやがつて。おとなしく俺のゆっくりになれ！

「観念するのはあんたの方よ」

「なにい？」

突如、俺の周りに陣が現れる。なんかカツコイイ幾何学模様が地面に浮かび上がり、俺を包囲するように光り出す。これは結界か!? あらかじめここに仕掛けられていた罠だろう。

「ふざけるな！もつと、俺たちの弾幕勝負はフェアだつただろうが！こんな人の風上にもおけない姑息な手を使って、お前には恥といつものがないのか！」

「黙りなさい。自分のやつにあた」とを棚に上げてよくもそんな戯言を吐けるわね」

「この冷徹女に俺の熱いビートをぶつける作戦は通じないか。しかし、こんな結界なんぞ、俺のゆ力をもつてすれば簡単に破壊できる……あれ？」

「ちいいー!? 俺のゆ力をもつても突破できないだと…? なんて結界だ」

「あら、氣に入つてもらえたようで何よりだわ」

「この言葉は靈夢が発したものではない。永遠亭の門が開いたかと思つと、屋敷の中から誰かが出てきた。三人いる。」

「永琳に、うどんげに、ゆ、ゆかりんだと……！」

「その呼び方はやめなさい。不愉快よ」

八意永琳とうどんちゃんがここにいるのはわかる。しかし、紫がどうしてここにいるのだ。しかも、ゆっくり化していないではないか…この結界もゆかりんが張つたものなのか…? 餡子まみれのスキマに逃げたのならば、ゆっくり化は避けられないはずだ。

「ま、待て! 状況がよくわからない! なぜ、俺の暗黒餡子世界に墮ちたはずの紫が健康な姿でここにいる! ?」

「確かにあなたのせいだ、私のスキマはわけのわからないことにされてしまったように見えた。でも、あなたはあなた自身、自分の能力を正確に把握できていないのよ。簡潔に結論だけ話せば、私は永琳の薬で治つたわ」

「え、えーりん先生……マジなの」

えーりん先生は「あらゆる薬を作る程度の能力」をもつ。つまり、ゆつくり化を治す薬を作ったといつ」とか。そのへんのことを、えーりん先生が説明してくれた。

「例の生首生物について調べたところ、ウイルス性の感染症が原因で身体組織に異常がでていることがわかつたわ。爆発的な感染力を持つた半體体レトロウイルスよ。このウイルスには種類があつて、精神毒を体内で作り出す 型と、身体組織を変質させる 型に分かれれる。 型は一次感染力が低く、パンデミックを起こす可能性は低いけれど、空気を媒介にして感染し、強烈な幻覚を見せる神経毒を作り出すの。そのせいで、これに感染した者は著しい能力行使不全に陥つてしまつ」

「え？ウイルスが原因？ちょっと待て、じゃあ俺のゆ力は？これはゆつくりたちの信仰の力じゃないのか！？」

「いいえ、あなたの力は相応の妖力だけよ。おそらく、あなた自身が 型に感染してしまつているせいだ、「ゆ力」などという幻覚を見ている。自分が強くなつたと感じる幻覚を見ることで、自己暗示をかけているのね。むしろ、自己暗示でそこまで強くなれるのだから能力としては破格よ。能力行使不全に陥つていたとはいえ、紫の妖力弾を受けて生きているなんて普通の小妖怪にはできないことよ。その代わり、受けたダメージは嘘ではない。あなたの体は今、限界寸前まで酷使されて本当なら動けなくなつているはず」

「そ、そんなわけ、あるかよ……！」

「そんなこと言つから体が痛くなつてきたじゃねえか！なんでだよ！なんでだ！なんで、俺の体、こんなに傷だらけなんだよ！ゆつく

リシールドで全弾、ゅっくりにしただろ！？ ゆっくり弾なんて痛くもかゆくもねえんだよ！ ちくしょうちくしょう！

「 型はさらに厄介ね。汚染された餌子状の物質に接触しただけで発症する感染力をもつていて。ごくわずかな潜伏期に異常増殖し、頭部とそれ以外の身体を分離するという障害を発生させる。頭部はもはや別の生物と化すわ。組織も脆くなり、簡単に壊れる。内部には糖度の高い餌子状の物質が作り出される。ここに大量のウイルスが蓄えられ、他者に捕食されることによって感染個体を増やしていく」

「 なに余裕ぶつて講釈たれんのだよ！ それは全部お前の妄想だ！ 僕の力がウイルスのよるものだつて！？ ああ、いいよ！ それでいいとも！ でもな、俺が最強であることに違ひはねえ！ なすすべもなく、お前らはゅっくり化すればいいんだよ！」

「 ただ、幸いなことに身体は頭部と別離しても、休眠状態に陥るだけで生命活動が止まるわけではないわ。早期に発見して治療すれば、もともどすことは可能よ。そして、すでに 型と 型のワクチンが完成したわ。まだ、ウイルスが体内にない人は一回の接種で完全に予防できる。すでに感染した人でも、潜伏期にあれば数回の接種で治療ができる」

「 うるせえ…… うるせえ、うるせえうるせえうるせえうるせえうるせえんだよ、俺は最強だああああああああ！」

「 ゆゆゆ符」真・ゅっくりして逝つてね！」

俺のゅっくりビームを最大威力でぶつ放す。俺には「あらゆるもの」を「ゅっくりしていつてね！」に変える程度の能力」がある。「

「あらゆるもの」をだ！「あらゆるもの」！すなわち、俺がゆっくりできないものはない！「クチンだと？」予防できるへやれるものならやってみろ！

だが、効かなかつた。靈夢たちは俺の弾幕を避けもしなかつた。うどんげははよつとびつくりしていたが、他の連中は動じない。そして、ゆっくりになつた者は、だれもいない。

「う、うれだー！」、「粉バナナ！」

「わあ、ぶちのめされる準備はできたかしら？」

「うふふ、どんな殺し方してやるか迷つちやうわ

「待ちなさい。実験の材料にしたいので殺さない程度にしておいて」

「なんだか、ここまでくると哀れに思えてきまや……」

上から、俺、靈夢、ゆかりん、えーりん先生、うどんげのセリフ。そして、結界といつ鳥か！」に囚われた、自由を奪われた鳥、俺は靈夢とゆかりんの弾幕の雨を全身で受け止めた。

「ひぎやあああああ……、いたいたいたいたいたいたたたたたた……やめええ！もう死んじやうよおおおおお……！」

「最強のあなたならこれくらいの弾幕ビリッとなじでしょ？」

「う、うつシールドだったかしらへ、それで防いだらどうなの？」

体中ビリもかしらも痛い。包丁でめつた刺しにされたよつた痛み

だ。いや、された！」とはないんだけじゃね。

俺はここで死ぬのか。  
いや、死ななくてもえーりん先生の実験動

物はされるといつ未踏が待つてゐる  
死んだ方がマシと思われる苦痛を訴えられてから死ぬのだ。

そんな人生、許容できるか。俺は自分の胸に問いかけた。幻想郷で最強になるんじゃなかつたのかよ。こんなところで、こんなウサギだらけの竹林で生涯の幕を閉じるのか？ どうなんだ、俺。黙つてんじゃねえ。お前に聞いてんだよ！ どうなんだ、俺えええ！ お前はこのままいいのかよおおお――

弾幕が止まつた。

俺の叫びとともに、一陣の風が巻き起こる。

ヒュゴオオオオオオオツ！

「なんなの、この気迫」

「窮鼠猫を噛むつてやつかしひ」

俺の体にゆ力が熱くたぎつていて。これは幻覚なんかじゃねえ。幻想なんかじゃねえ！この力は俺の力だ！

！もつと、力を！俺にゆ力を！

「ウチの仕事は、おまえたちの仕事だよ。おまえたちの仕事だよ。」

「なに、あれ……」

「自分自身の姿を変えているー?」

「そう、俺は俺自身をゆつくり化した。ゆつくりそのものになることで、俺のゆ力は何倍にも増幅する。無限増大するゆ力は、この幻想郷を一変させるほどの力となるのだ！」

そのとき、俺の遙か頭上に一つの影が現れた。その者は永遠亭のウサギ、因幡てゐ。高く伸びあがつた竹の上から、こちらに向かつて落ちてきた。馬鹿め！パンツが丸見えだ！ゆ力を全開放した俺に向かつて無防備にも飛びかかつて来たこと、後悔させてやろう！

ゆゆゆゆ符「つざき微笑みアルティメットカタストロフゆづく」  
グシヤア！」

＊  
＊  
＊

「ていつ！」

グシヤ！

俺の体に、てゐの裸足がめり込む。俺の餡子が飛び散つた。てゐの足の指にめり込んだ餡子が押し出されて餡子団子ができる。てゐ

はウンノでも踏んだかのように自分の足を竹の葉っぱになすりつけながら、えーりん先生のところに帰つて行つた。

「あ、あ、あ、あ、……あ、あ、あ、……あ、あ、……」

そうか、ゆつくりになつたら、防御力、紙じやん。

こうして俺の第一の人生は終了し、幻想郷の異変は、てゐの足によつて解決した。さようなら、俺の幻想郷。閻魔様にこれからどんな説教をされるのか考へると、鬱になつた。

\* \* \*

後日談。

ゆつくり化してしまつた幻想郷の住人達を治療するため、永琳は彼女たちの顔にそつくりなパンを焼いた。それを靈夢が「新しい顔よー」と言つて、首がなくなつた体に投げつけたところ、見事に合体。元気百倍になつて復活したという。最後にひとつ。

ゆつくりしていつたね！（笑）

END

(後書き)

プロファイール

悉皆屋ゆとり

種族：生首饅頭妖怪

外見は幼い少女。不愉快なデザインをした着物を着ている。

「ゆっくりウイルス操る程度の能力」をもつ。

幻想郷縁起に名を残す性悪妖怪。その力を使って奇病「ゆっくり病」を蔓延させた張本人。

勝つためには手段を選ばず、騙し討ちを得意とする。スペルカードルールを無視するなど最低最悪な性格をしている。良いところが一つもない。

小妖怪だが、優れた能力をもつため、うかつに相手をすることは危険。だれかれ構わず、攻撃をしかける狂暴性がある。

八意永琳の薬によつて、異変は解決した。彼女の薬がなければ、幻想郷は未曾有の被害を受けただろう。幸いにも死者は出なかつた。その後、ゆっくりは駆除指定されたが、森の奥に逃げ込んだ個体が多数おり、今もときおり見かけることがある。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1057u/>

---

東方 ゆ餡穢

2011年10月7日02時39分発行